

---

# 楽譜を残して、

snow

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

楽譜を残して、

### 【Nコード】

N0083S

### 【作者名】

snow

### 【あらすじ】

沢田は友人ふたりが話す幽霊出没の噂を聞く。

しかし、その晩忘れ物を取りに行った沢田は

昼間友人が話した”幽霊”に出くわしてしまつて：

ふと昼間の話を思い出した。

＊

「高杉……と沢田！  
俺、見たんだ！」

前後の席で話している僕と高杉の所へ岡本が割り込んできた。  
発言で大事なところを抜かすのは岡本のいつもの癖だ。

高杉が面倒そうに聞き返す。

「で？ 何を見たって？」

「幽霊だよ！ 幽霊！」

岡本は僕の机を両の掌でバンバン叩きながら大声で言う。

僕はさりげなく筆箱を中央のほうへと寄せた。

無論、落ちないようにという配慮だ。

『幽霊？』

僕の震えそうな声と高杉の呆れたような声が重なる。

「は？ 幽霊？」

怪訝な顔で高杉が再度言う。

「ああ。ほら堤防んとこに赤い橋があるだろ？  
名前、わかんねーけど」

「ああ、あの橋か。でもさあ、幽霊なんかいる訳ねーだろ」

僕はこの話を聞くだけになっていた。

「でも見たんだよ！」

高い歌声とか聞こえてきてさ、声がしなくなったと思ったら  
一瞬白い影が見えたんだ！」

「馬鹿みてー。幻覚でも見たんじゃないの」

「いや！俺は幽霊を見たんだ！」

僕は意地でも幽霊を見たと言い張る岡本とそれをあしらう高杉を苦  
笑いで見るだけだった。

＊

僕はその会話を思い出しながらため息をついた。

くそ、なんでこんな日に限って忘れ物をするんだ。

僕の家は学校からひとつ川を越えたところにある。

つまり昼間話題になっていたあの橋を通らなければならないということだ。

そして僕は今、問題の橋の前にいる。

普段は何でもない距離が長く感じられる。

今は高杉の「幽霊なんていない」という言葉を信じるしかなかった。

思い切って踏み出したはじめての一步は情けないほどに震えていた。

それからしばらく進むが、何も聞こえないし、何も見えない。

そういえば僕に靈感なんて大層なもの wasn't なかった。

いや、他にもないものはたくさんあるが。

義務教育課程の勉強を消化しきる頭や、ひとなみの体力、その他もろもろ。

そんなのん気なことを考えていたときだった。

突然、女の高い声が聞こえた。

それは、幽霊、の、声……。。

「うわあああ」

口から漏れたのは悲鳴にすらならないかすれた声だった。

へたり込んだときについた手から石畳のひんやりした冷たさが伝わった。

背筋がぞつ、とする。

無論、それだけの理由ではないとは分かっていたが。

どうしよう、幽霊がいた。

そう思っている間も歌声は続く。



だが、僕は不思議なことに気づく。

どこかで聞いたことがある、と思ったその旋律は、アメイジング・グレース。

……幽霊が歌うだろうか。

昔から耳がいい、いや耳だけはいいいといわれていた僕だったためか、冷静になるとその声はどうやら下のほうから聞こえてくるとわかった。

この下、つまり橋の下。

だんだんと歌い手の顔が見たくなった。

たとえばそれが幽霊だったとしても。

どんなひとが、どんな表情で歌っているのだろう。

アメイジング・グレース。

女神の賛歌を。

そう思ったときには橋を向こう側まで渡りきり、堤防を降りようとしていた。

生い茂っている草を足がかりにして降りていく。

幽霊だろうと何でもいい。

そのとき僕はその歌声に惚れていたのだ。

しかし、次の瞬間、ぶちっ、と嫌な音がした。

上半身から宙に浮く感覚があり、音の正体に気づく。

ああ、手で掴んでいた草が千切れたんだ。

そして声にならない悲鳴をあげ、地面にどさつ、と落ちる。

下がやわらかい土で命拾いした。

だが当然のことながら歌い手も僕が存在に気づいたようではた、と歌声が止まり、少しの間静寂が訪れた。

そして

「大丈夫ですか？」

と細く小さな声がした。

幽霊じゃなかった、と内心安堵しつつ顔をあげると

そこにいたのは僕と同じ年くらいの女の子だった。

橋の下という暗がりでも白い肌は

確かに遠くから見たら幽霊らしく見えるかもしれない。

そしてそんな暗がりでも白い頬に映える朱の色。

「平気……だと思っけど。

あの、さっきの歌……」

そこでその少女は自分の歌を聞かれていたという重要なことに気づいたらしく、  
置いてあったたくさんの楽譜を無造作にクリアファイルに押し入れて、

「すみませんごめんなさいっ」

となぜか謝り、くるっ、と振り返って走り去った。

その間、わずか五秒。

「あの……」

と声をかけた頃にはもう声の届かない距離にいた。

立ち上がって土まみれの服を手ではたく。

少女がいた場所まで行くと大きな石の上に一枚の楽譜が置きっぱなしになっていた。

左下に小さく書かれている曲名は、

アメイジング・グレース。

最後の一枚のようだった。

そつと指先で拾い上げてみると、薄く細い字で几帳面に書き込みがしてある。

—————これがないと、あの子、困るよな。

しかし、僕は名前も聞いていなければ顔もよく見ていない。

つまりこれを家やら学校やらに届けられるはずがないということだ。

ということは、ここで会ったこと以外に接点がない。

ならば、ここでなければこの一枚の楽譜を届けることはできないだろう。

あしたもまたここへ来よう。

僕はそう決め、汚さないように折り目をつけないように楽譜を持った。

さっきのように見事な落下をする訳にいかないため、ゆるやかな坂になっているところを探して慎重に登る。

家路について自分の足取りがいつもよりも随分軽くなっていることに気づく。

何かいいことがあっただろうかと思い返すのだが、情けないことばかりだ。

しかし、その先を思い出して納得した。

またあの声を聴ける、アメイジング・グレースを歌う少女に会えるかもしれない、ということが嬉しかったのだ。

……ちなみに補足しておこう。

忘れ物を取りに行くという目的を忘れたことに気づいたのは、家に  
ついた後だった。

そして、翌日。

「え、沢田、幽霊見たのか？」

高杉が珍しく驚いた声色で言う。

＊



僕が答える前になぜか岡本が答える。

「ほら！　嘘じゃねーだろ？　幽霊！」

正確にはまだ幽霊、とは言っていないのだが。

「で？　お前どうしたんだよ、そんな時」

高杉が岡本をあしらいながら、僕に問う。

少しためらったが、苦笑いをして答える。

「怖くてさー……逃げたんだよね、僕」

その言語に二人そろって吹出す。

「お前らしいー。そうだよな、まだ僕、が一人称だもんな、お前！」

「……それは関係ないだろうけど、ま、怖がってっから錯覚だろ、やっぱ」

「いや、沢田は錯覚でもありえるが俺は違うぞ！」

「似たようなもんだろ、お前ら」

二人の会話を聞いて、僕は相当のへたれだと思われているらしいということが再確認できた。

そうして、僕は嘘をついた。

怖かったのは事実だが、逃げてはいない。

逆にその声を追ったくらいだ。

それを言えば少しは見直されたか、と考えると少しだけ惜しい。

しかし、なぜ嘘をついたのだろうと考えた。

ほんとうになんとかなく、なんとなくだったのだ。

だが、秘密にしておきたかったからだ、と答えが出た。

あの橋の下にいたのは幽霊ではなくて、女神の賛歌をうたう少女だったことを。

## (後書き)

はじめまして。雪です。

多くの人の意見を参考にしたいと思っているので、アドバイス等々  
よろしくお願いします。

今回は短編を投稿させて頂きましたが、ゆくゆくは長編にも挑戦し  
たいと思います。

尚、誤字脱字等あったら知らせてくださると有り難いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0083s/>

---

楽譜を残して、

2011年10月8日22時17分発行